

Title	浜松低地に分布する遺跡の立地環境
Sub Title	Sedimentary environment around archaeological sites in the Hamamatsu lowland
Author	松原, 彰子(Matsubara, Akiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2004
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 No.14 (2004.), p.35- 52
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20040000-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

松原 彰子

1. はじめに

日本の沿岸部には、砂州地形（砂州および浜堤）が普遍的に分布する。これらは、完新世における海面変化に対応して発達してきた。完新世前半の海面上昇期には、内陸側に向かって砂州が発達していったのに対して、完新世後半の海面低下期には、浜堤が海側に付加する形で発達した（Matsubara, 1988；松原, 1989）。また、こうした発達過程は、現在の砂州地形およびその周辺部の形態にかかわらず、共通したものであることが明らかにされている（松原, 2000；Matsubara, 2002）。

一方、日本の海岸低地は縄文時代以降、人間活動の中心的な場であり、完新世における地形環境の変化は、人間活動に大きな影響を及ぼしてきたものと推定される。松原（2000）、Matsubara（2003）は、駿河湾沿岸低地において、砂州地形の発達に伴って人間活動の場が移動する過程を明らかにした。

本研究は、顕著な砂州地形の発達が見られ、しかも低地遺跡が多く分布する浜松低地を対象にして、砂州地形と人間活動との関係を考察することを目的とする。本報告では、砂州間の堤間湿地ないしは砂州の縁辺部に立地する4つの遺跡（梶子遺跡、梶子北遺跡、中村遺跡、東前遺跡）の発掘調査の際に行った地形・地質調査の結果、および絶対年代測定結果に基づいて、それぞれの遺跡の立地環境を明らかにする。

浜松低地は、浜名湖東側の三方原台地の南に広がり、6列の砂州地形（内陸側から順に砂州Ⅰ～Ⅵ）が分布することで特徴づけられる。砂州地形は、低地の東部では6列が明瞭に区別できるが、西部では砂州Ⅱの連続性が見られなくなり、砂州Ⅲから砂州Ⅴまでの境界が不明瞭になる。さらに、浜名湖の湖口付近では3列の砂州地形に収斂する（図1）。

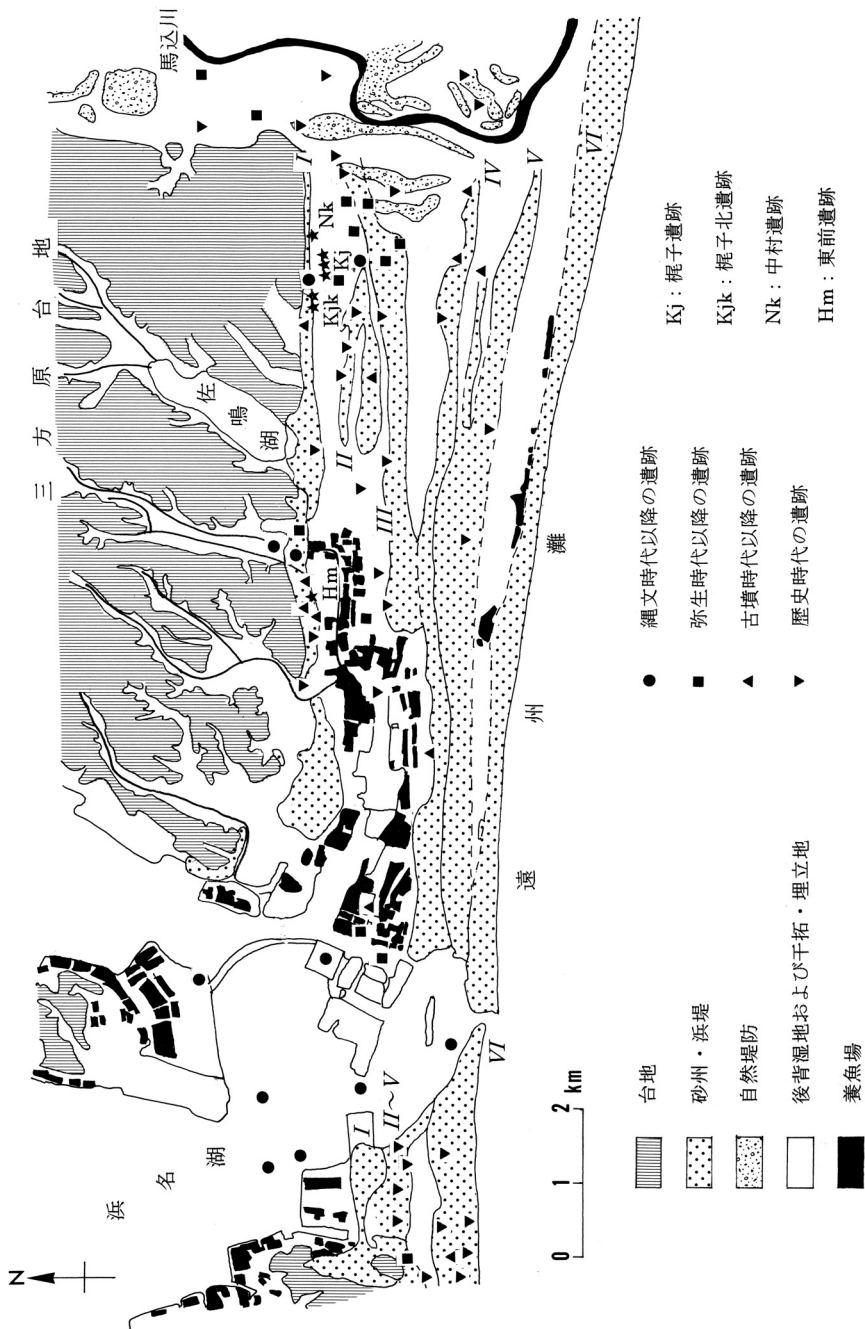


図1 浜松低地調査地域図

遺跡分布は、静岡県教育委員会（1989）および浜松市博物館（1996）による。

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

低地西部の砂州Ⅰと砂州Ⅲの間には水域が広がり、周辺には養魚場が密集する。また低地全体では、砂州Ⅴと現在の海岸沿いに発達する砂州Ⅵとの間の後背湿地にも養魚場が分布する。

浜松低地の地質は、全体に砂質堆積物（砂ないし砂礫）が主体であり、これらは砂州地形の構成層と考えられる。ただし、表層付近（標高約-5m以浅）では、後背湿地を中心に泥炭質のシルト・粘土層が分布する（松原，2001）。

浜名湖およびその沿岸では、湖口部の湖底を中心に縄文時代の遺跡が発見されている。また、湖口西側の砂州上には、古墳時代と歴史時代の遺跡が多く分布する。一方、浜松低地においては、縄文時代の遺跡分布は、砂州Ⅰおよび砂州Ⅰ—砂州Ⅱ間の低湿地上に限定される。また弥生時代の遺跡は、砂州Ⅰ、Ⅲおよびこれらの堤間湿地に分布する。さらに古墳時代と歴史時代の遺跡は、砂州ⅠからⅤの上に分布している（図1）。

今回、調査対象とした4つの遺跡は、梶子遺跡（地点Kj-1, 2, 3）が砂州Ⅰ—砂州Ⅱ間の低湿地、梶子北遺跡（地点Kjk-1, 2）、中村遺跡（地点Nk-1）、東前遺跡（地点Hm-1）が砂州Ⅰの海側の縁辺部に、それぞれ位置している（図1）。

2. 梶子遺跡

梶子遺跡は、三方原台地南縁に発達する砂州Ⅰの南方に位置し、砂州Ⅱとの間の低湿地上に立地する（図1）。本遺跡からは、弥生時代中期から平安時代までの遺物・遺構が見つかっている（浜松市博物館，1994）。

本遺跡では、2001年度から2002年度に行われた10次発掘調査において、3箇所（地点Kj-1, 2, 3）で地形・地質調査を行った（図2）。

(1) 地点Kj-1の層序区分

本地点は、梶子遺跡JR10C地区の発掘調査地域にあたり、2002年3月4日に地層観察ならびに試料採取を行った。なお、試料採取は東西方向のトレンチの北側壁面で行った。

本地点の堆積物は、上から順にⅠ～Ⅵ層に区分できる（図3）。

Ⅰ層（+0.79～+0.16m）：グライ化した淡灰色の粘土である。

Ⅱ層（+0.16～-0.04m）：淡灰色粘土で、植物遺体を含む。

Ⅲ層（-0.04～-0.23m）：植物遺体をまじえる暗灰色粘土である。

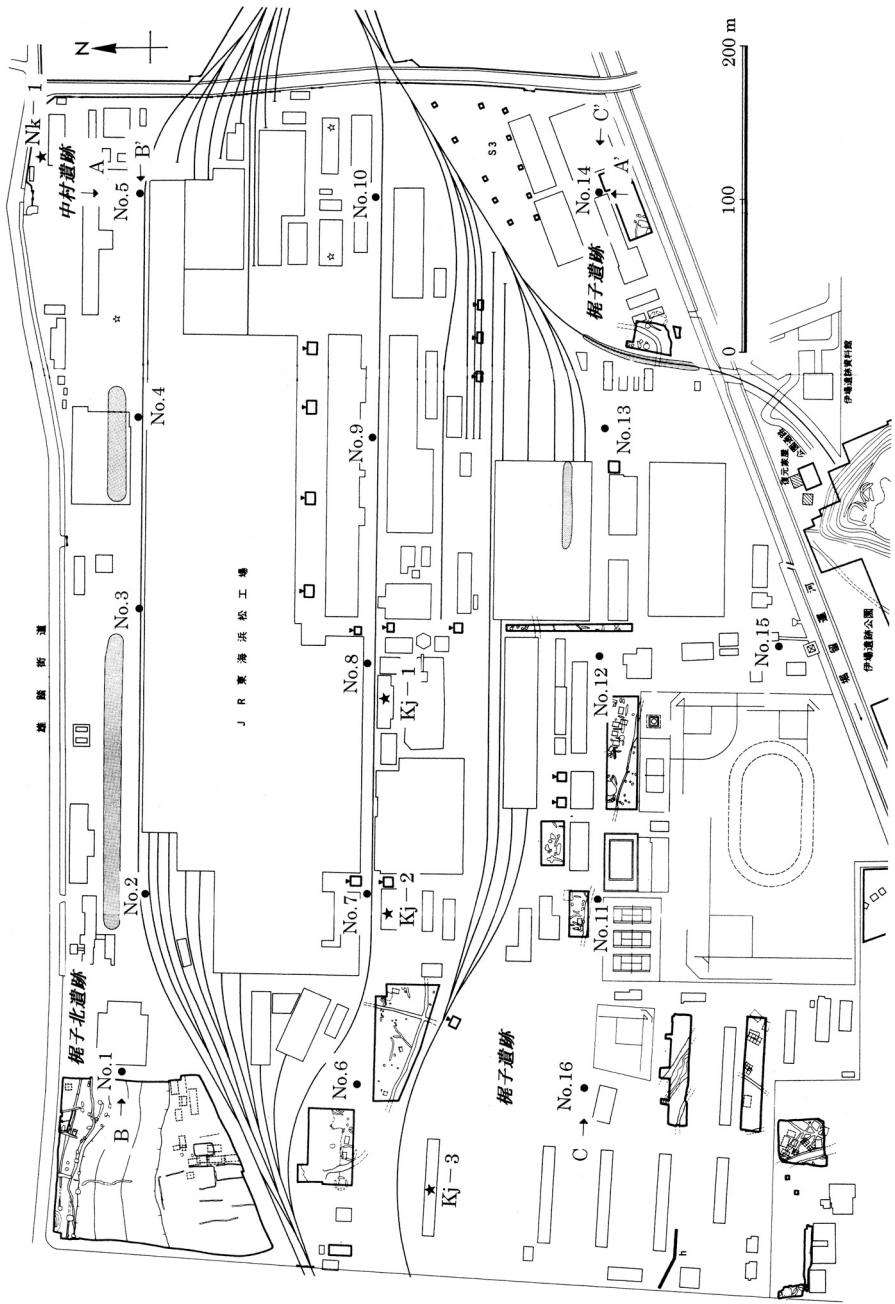


図2 梶子遺跡・梶子北遺跡・中村遺跡位置図
 A - A', B - B', C - C'は断面線の位置を示す。
 浜松市博物館 (1997) に加筆。

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

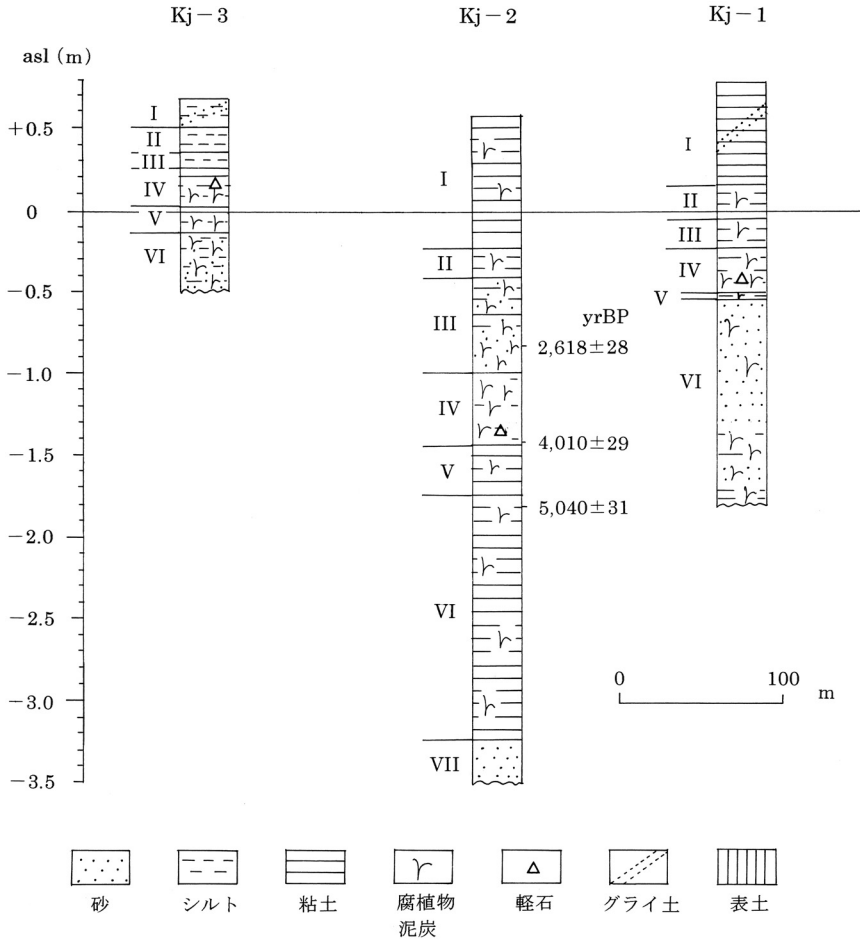


図3 梶子遺跡における地質層序区分
各地点の位置は図2に示す。

IV層（-0.23～-0.50 m）：黒色粘土で植物遺体を含む。-0.40m付近には、軽石質の砂が含まれる。

V層（-0.50～-0.54 m）：淡灰色の粘土で、トレンチの東側ほど厚くなる。

VI層（-0.54～-1.65 m以深）：-0.54～-1.29mは泥炭質の淡灰色中～細砂で、地下水の帯水層になっている。-1.29～-1.55mは淡灰色粘土で、泥炭を含む。-1.55～-1.65mは、泥炭をまじえる淡灰色の中～細砂である。-1.65 m以深には、泥炭質の粘土が堆積している。

表1 浜松低地で得られた¹⁴C年代測定値

半減期は5,568年を用いた。

Loc.	Sample No.	Height asl. (m)	Lab.code No.	Material	¹⁴ C age (yr BP)	Cal BP
Kjk-1	H00-1	+0.2~+0.1	NUTA2-621	Peat	3,200±20	3,438
	H00-2	+0.15	NUTA2-721	Charcoal	1,470±20	1,347
Kjk-2	H00-3	+0.94~+0.84	NUTA2-2178	Peat	2,314±23	2,343
	H00-4	+0.84~+0.74	NUTA2-2179	Peat	2,418±22	2,427
	H00-5	+0.74~+0.64	NUTA2-2182	Peat	2,430±22	2,447
	H00-6	+0.64~+0.54	NUTA2-2183	Peat	2,723±22	2,837
	H00-7	+0.52~+0.42	NUTA2-2184	Peat	2,946±23	3,156
Kj-2	H01-1	-0.82~-0.84	NUTA2-3905	Peat	2,618±28	2,749
	H01-2	-1.40~-1.42	NUTA2-3906	Peat	4,010±29	4,506
	H01-3	-1.79~-1.84	NUTA2-3907	Peat	5,040±31	5,842
	H01-4	-1.74	NUTA2-3908	Peat	3,031±29	3,242

(2) 地点Kj-2の層序区分

本地点の調査は、梶子遺跡JR10B地区の発掘調査地域にあたり、2001年11月29日に地層観察ならびに試料採取を行った。なお、試料採取は2つのトレンチのうち北側（トレンチA）の南側壁面で行った。

本地点の堆積物は、上から順にI~VII層に区分される（図3）。

I層（標高+0.58~-0.22m）：淡褐色の粘土で、植物遺体をまじえる。

II層（-0.22~-0.41m）：植物遺体を含む灰色の粘土である。

III層（-0.41~-0.99m）：-0.41~-0.50mは暗灰色粘土と淡褐色粘土の互層で、共に植物遺体をまじえる。-0.50~-0.64mは、やや砂質の黒色粘土で植物遺体を含む。-0.64~-0.76mは、黒色の砂質粘土で泥炭をまじえる。-0.76~-0.99mは、砂混じりの黒色泥炭である。-0.81m付近の泥炭に含まれる植物片について絶対年代測定を行った結果、2,618±28yr BPが得られた（今回得られた絶対年代測定値は、表1にまとめた）。

IV層（-0.99~-1.44m）：-0.99~-1.17mは黒褐色の泥炭であり、-1.17~-1.29mは黒灰色の泥炭である。-1.29~-1.44mは淡黄褐色の泥炭で、細砂サイズの軽石を含む。本層中の-1.41mの泥炭の絶対年代値は、4,010±29yr BPであった。

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

V層（-1.44～-1.74 m）：植物遺体を含む淡灰色の粘土である。

VI層（-1.74m～-3.24 m）：黒灰色の粘土で泥炭を含む。本層の-1.82m付近の泥炭の絶対年代測定値は、 $5,040 \pm 31\text{yr BP}$ であった。

VII層（-3.24 m以深）：暗灰色の中～細砂で、地下水の帯水層である。

(3) 地点Kj-3の層序区分

本地点は、梶子遺跡JR10A地区の発掘調査地域にあたり、2002年8月6日に地層観察ならびに試料採取を行った。なお、試料採取は東西方向のトレンチの南側壁面で行った。

本地点の堆積物は、上から順にI～VI層に区分される（図3）。

I層（+0.69～+0.52 m）：淡灰色のシルトで、グライ化している。

II層（+0.52～+0.37 m）：淡灰色のシルトで、ややグライ化している。

III層（+0.37～+0.28 m）：灰色のシルトである。

IV層（+0.28～+0.04m）：+0.28～+0.18mは、灰色のシルトである。+0.18～+0.15mは植物遺体を含む黒色粘土で、軽石をまじえる。+0.15～+0.04mは暗灰色粘土と淡灰色粘土との互層で、共に泥炭を含む。

V層（+0.04～-0.11 m）：泥炭混じりの淡灰色粘土である。

VI層（-0.11～-0.50 m）：-0.11～-0.30mは泥炭混じりの灰色粘土で、やや砂質である。-0.30～-0.36mは砂混じりの暗灰色粘土で、泥炭をわずかに含む。-0.36～-0.50mは粘土混じりの暗灰色粗～中砂で、泥炭をわずかに含んでいる。

(4) 梶子遺跡の地質層序と堆積環境

地点Kj-1, 2, 3における堆積物の特徴から、各地点のI層からVI層までを、それぞれ対比することができる。また各層の堆積環境は、以下のように推定される。

I層およびII層は、植物遺体をまじえる淡灰色のシルト・粘土層で、グライ化していることから、水田耕作が行われていた時期の堆積物と推定できる。

III層は、植物遺体を含む暗灰色ないし灰色のシルト・粘土層であり、地点Kj-2で得られた年代値（ $2,618 \pm 28\text{yrBP}$ ）から、およそ2600年前の湿地性の堆積物と考えられる。

IV層は、黒色の泥炭あるいは泥炭質粘土が主体であり、湿地性堆積物と考えられる。本層の特徴は、軽石または軽石質砂を含む点である。同様の軽石は、梶子遺跡9次調査の際にも、ほぼ同一層準から見つかっており、屈折率の測定結果から、およそ2700～

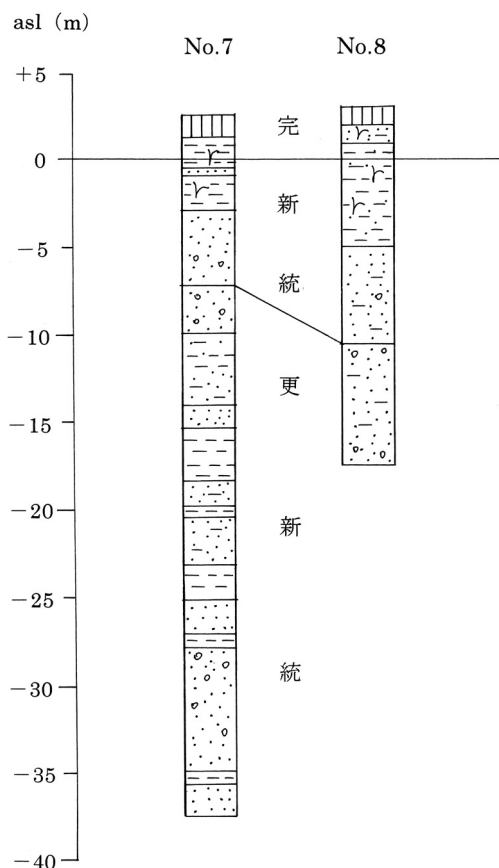


図4 梶子遺跡付近の地点No.7, No.8の地質柱状図
 地点の位置は図2に示す。
 凡例は図3と同じ。

3000yrBPに伊豆半島の天城カワゴ平火山から噴出したカワゴ平軽石(KgP)と判定されている(古環境研究所, 1994)。またKgPは、梶子遺跡の南側に分布する伊場遺跡でも確認されており(加藤, 1979; 増島, 1979), 浜松低地に広く分布しているものと推定される。したがって、本層中の軽石もKgPである可能性が高い。ただし、地点Kj-2でIV層から得られた年代測定値($4,010 \pm 29$ yrBP)は、KgPの降下年代よりも1000年ほど古い。この矛盾については、今後、軽石の同定結果などに基づいて検討する。

V層は、泥炭混じりの淡灰色の粘土層であり、上位および下位の泥炭質堆積物に比べて色調が明るいのが特徴的である。本層に関しては、湿地に一時的に河川水が流入するような環境の堆積物である可能性が考えられる。

VI層は、泥炭質の粘土と砂を主体とした堆積物である。地点Kj-1では、特に砂の含有量が多い。本地点に近いNo.8の地質ボーリング試料によれば、VI層に対比される砂まじりの泥炭質層が標高約-5mまで確認される(図4)。本層の堆積時期については、地点Kj-2において、本層上部から絶対年代値 $5,040 \pm 31$ yrBPが得られた。また、古環境研究所(1994)が行った梶子遺跡9次調査での花粉化石分析結果によると、本層に対比される泥炭層の最下部からイネ科、カヤツリグサ科のほか、ガマ属-ミクリ属の草本花粉化石が多く産出している。このことから、本層は湿地環境の堆積物と考えられ、本層中に含まれる砂の起源は、河川の流入によるものか、海側に形成されていた砂州IIからの流れ

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

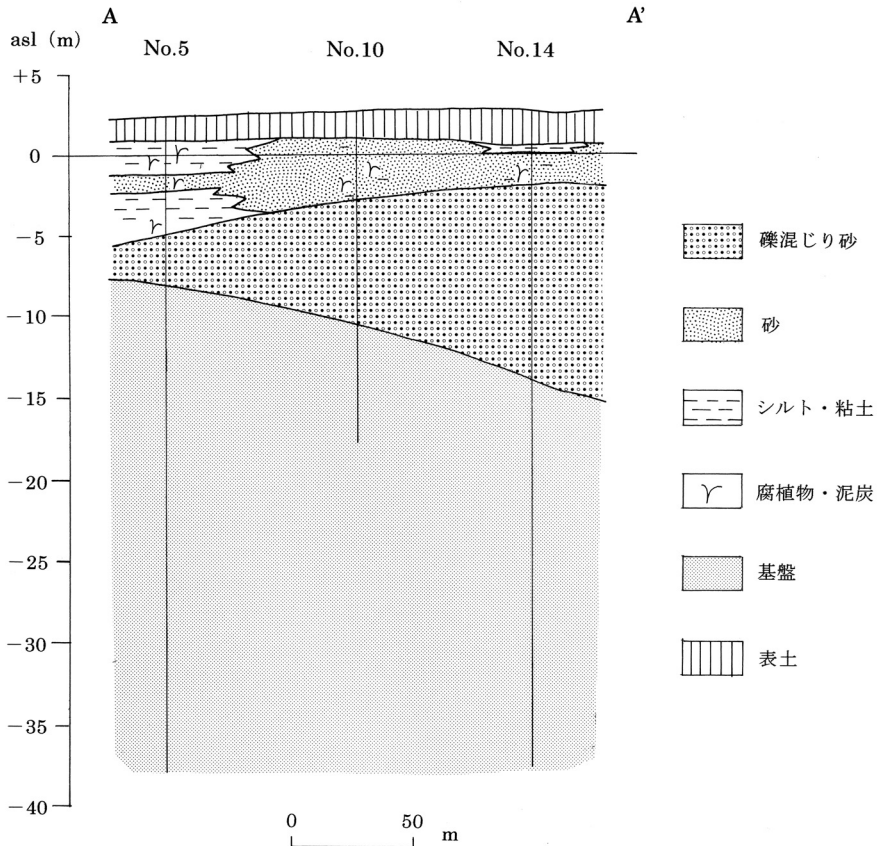


図5 梶子遺跡A-A'地質断面図
断面線の位置は図2に示す。

込みのいずれかである可能性が高い。

地点Kj-2のみで確認されたVII層は、暗灰色の砂層であるが、上位の堆積物のように湿地環境を示す植物遺体は含まない。また、本地点に近いNo.7の地質ボーリング資料によれば、標高およそ-3m以深に厚さ約4mの砂層が認められ、この砂層はVII層と対比することができる(図4)。この砂層の下位には、湿地性堆積物は見られない。梶子遺跡9次調査の際に、ほぼ同一層準の砂層の粒度分析を行った結果によれば、この砂は砂丘砂で、南側の砂州からの流れ込みと推定されている(加藤, 1994)。しかし、この砂層の分布を見ると、梶子遺跡およびその周辺に広く堆積していることから(図5~図7の礫混じり砂層)、砂州堆積物そのものである可能性が高い。したがって、砂州Iと砂州IIとの間

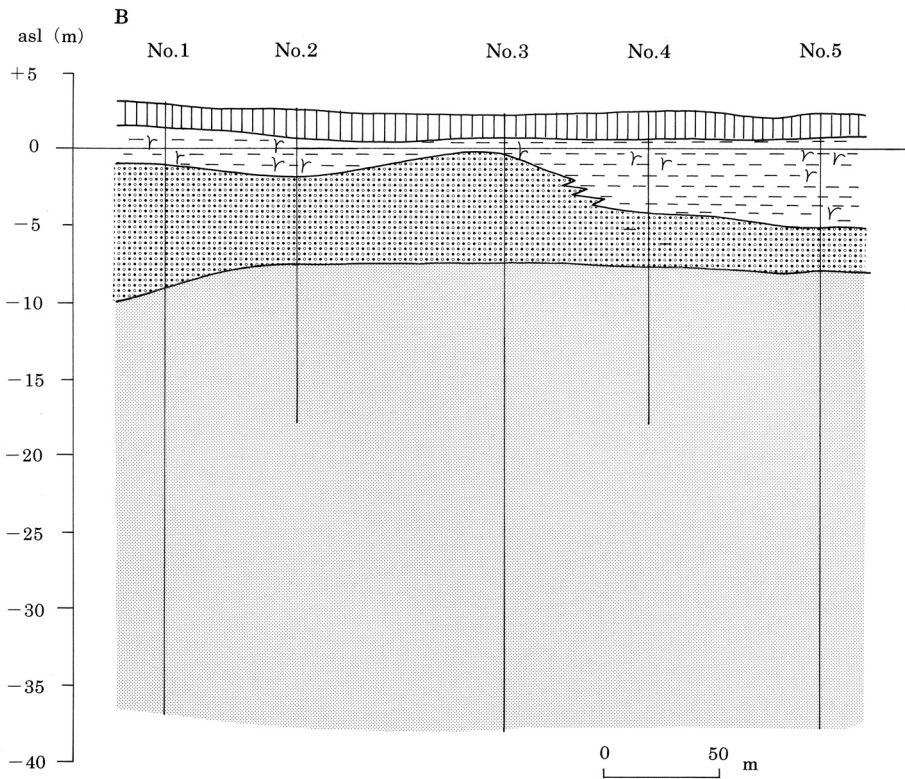


図6 梶子遺跡B-B'地質断面図
 断面線の位置は図2に示す。
 凡例は図5と同じ。

に埋没砂州が存在することも考えられる。今後、砂層上面高度の分布を詳細に調査することで、この点が明確になろう。

梶子遺跡9次調査では、このVII層に対比される砂層直上の泥炭層、すなわちVI層最下部の絶対年代値として $6,090 \pm 10\text{yrBP}$ が得られている（古環境研究所，1994）。このことから、本地域が湿地環境になったのは、およそ6000年前までさかのぼり、この時期にはすでに海側の砂州IIが離水して背後を完全に閉塞していたものと推定される。したがって、砂州Iの形成時期は、これよりも前までさかのぼることになる。浜名湖における砂州Iの形成開始時期がおよそ8000年前で、完成時期が約7000年前であると推定されている

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

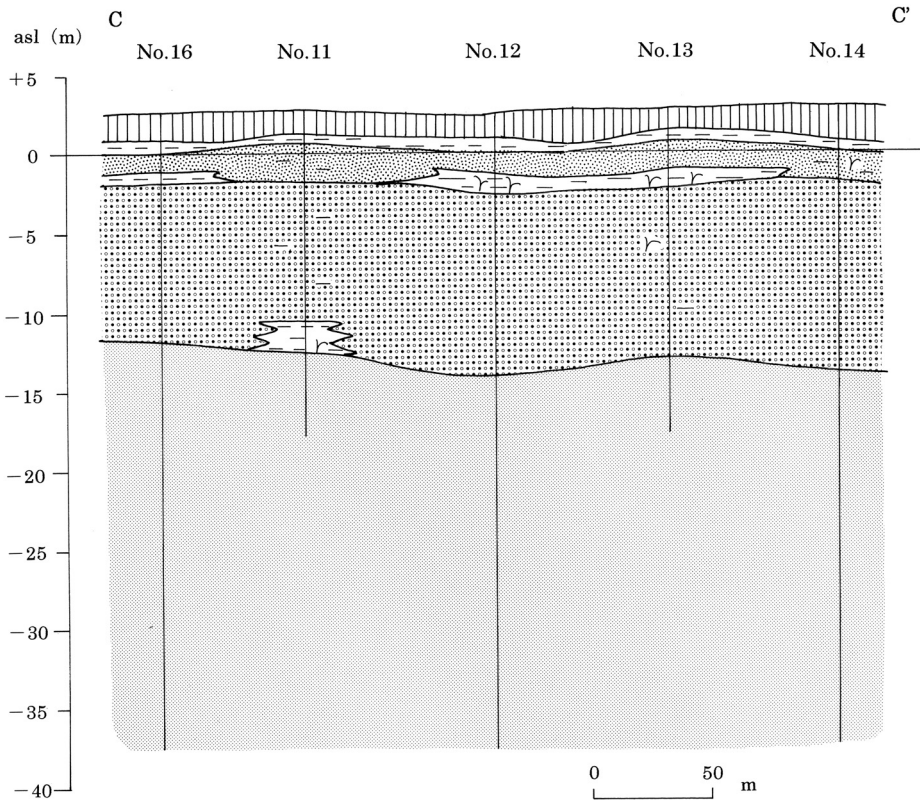


図7 梶子遺跡C-C'地質断面図
断面線の位置は図2に示す。
凡例は図5と同じ。

ことから（松原，2000；2001），浜松低地においても砂州Iは，8000～7000年前に形成された可能性がある。

(5) 砂州堆積物の基盤

図5～図7は，梶子遺跡とその周辺のボーリング資料に基づいて描いた地質断面図である。ここでは，堆積物は未固結の砂やシルト・粘土が主体であるが，標高-10m付近よりも下位には，固く締まった砂礫層とN値が30以上のシルト・粘土層が厚く堆積していることが確認された。これらは，三方原台地を構成する更新統であると推定される。更

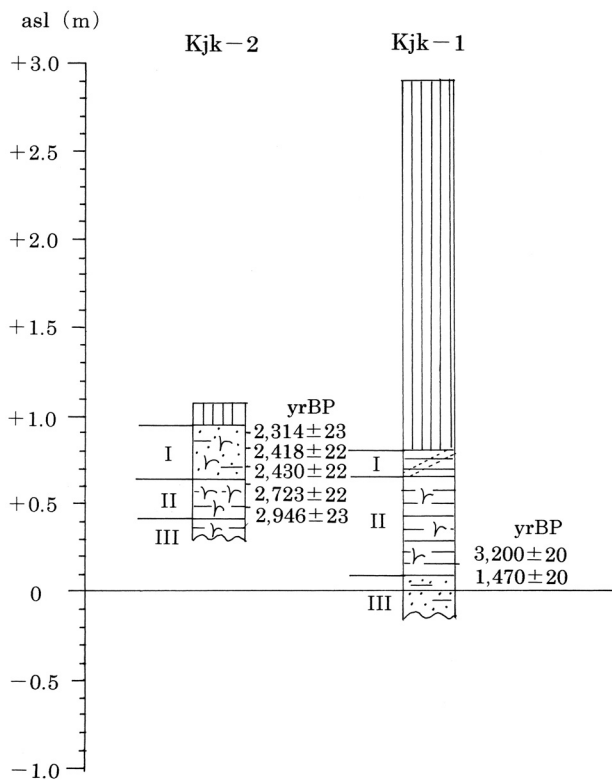


図8 梶子北遺跡における地質層序区分
地点の位置は図2に示す。
凡例は図3と同じ。

かにされている (松原, 2000)。

3. 梶子北遺跡

梶子北遺跡は、梶子遺跡の北西側に位置し、三方原台地南縁の砂州Iの縁辺部にあたる(図1)。本遺跡からは、縄文時代前期から平安時代までの遺物・遺構が見つまっている(浜松市博物館, 1997)。

本遺跡では、1999年度から2000年度に行われた発掘調査において、2箇所(地点Kjk-

新統の上面高度の分布を見ると、東西方向の断面図では明瞭な平坦面が認められる(図6, 7)。また南北方向の断面図では、更新統上面は南に傾斜している(図5)。この形態から判断して、この平坦面は埋没海食台である可能性が高い。したがって、本地域では、三方原台地の前面に形成された海食台の上に砂州地形が形成されてきたものと推定される。同様のことは、駿河湾や相模湾沿岸の低地でも確認されている。すなわち、駿河湾西岸の榛原低地では約-5mに、相模川下流低地では約-10mに、それぞれ埋没海食台が分布し、これらが砂州地形の土台になっていることが明らか

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

1, 2) で地形・地質調査を行った (図2)。

(1) 地点Kjk-1の層序区分

本地点の地層観察ならびに試料採取は、2000年1月26日に行った。

本地点では、+2.89～+0.90mの盛土よりも下位の堆積物を、上から順にI～III層に区分することができる (図8)。

I層 (+0.90～+0.75 m) : 淡灰色のグライ化した土壌である。

II層 (+0.75～+0.09 m) : 暗灰色の泥炭質粘土で砂をまじえる。本層下部の+0.15 m付近に含まれていた炭化物と泥炭の絶対年代測定を行った結果、それぞれ $1,470 \pm 20$ yr BPと、 $3,200 \pm 20$ yr BPが得られた。本層の上部からは平安および奈良時代の遺物が発見されている。また、本層下部からは弥生時代の土器片が見つかっている。

III層 (+0.09 m以深) : やや粘土質の細砂である。

(2) 地点Kjk-2の層序区分

本地点の地層観察ならびに試料採取は、2000年10月18日に行った。

本地点では、+1.07～+0.94 mの盛土よりも下位の堆積物を、上から順にI～III層に区分することができる (図8)。

I層 (+0.94～+0.64 m) : 泥炭を含む黒色のシルト質細砂であるが、上部ほどシルトの含有量が多い。本層の3層準で、次の絶対年代測定値が得られた。+0.89 m付近の泥炭は $2,314 \pm 23$ yr BP、+0.79 m付近の泥炭は $2,418 \pm 22$ yr BP、+0.69 m付近の泥炭は $2,430 \pm 22$ yr BPであった。

II層 (+0.64～+0.42 m) : 黒色の泥炭質粘土である。本層中の+0.59 m付近の泥炭の絶対年代値は $2,723 \pm 22$ yr BP、+0.47 m付近の泥炭は $2,946 \pm 23$ yr BPであった。

III層 (+0.42m以深) : 淡灰色の粘土である。

(3) 梶子北遺跡の地質層序と堆積環境

地点Kjk-1とKjk-2のI層からIII層は、それぞれ対比できる。

I層とII層は共に泥炭質であることから、湿地環境の堆積物と推定できる。地点Kjk-2において、泥炭層をほぼ10cmおきに測定した5点の年代値から、泥炭層の平均堆積速度はおよそ $0.7\text{mm}/\text{yr}$ と推定される。

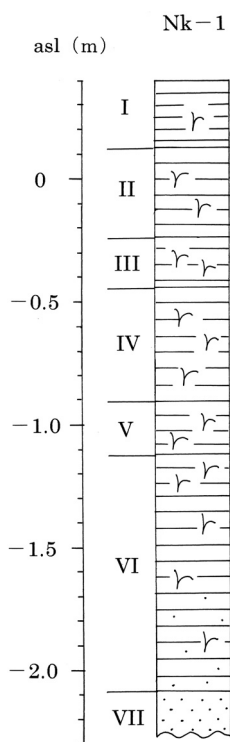


図9 中村遺跡における地質層序区分
凡例は図3と同じ。

地点Kjk-1において、II層下部から得られた2つの年代値がくいちがっていることについては、地点Kjk-2の複数の年代値との比較、およびII層下部から弥生時代の土器片が見つかることから、泥炭の年代値である $3,200 \pm 22\text{yrBP}$ の方が妥当であると考えられる。一方の年代値 $1,470 \pm 20\text{yrBP}$ が得られた炭化物については、サンプリングの際に他から混入した可能性も考えられる。

III層は、層相（特に色調）の特徴と堆積の推定年代（およそ3000年前）から、梶子遺跡におけるV層に対比され、湿地に一時的に河川水が流入するような環境が推定される。

4. 中村遺跡（地点Nk-1）の地質層序と堆積環境

中村遺跡は、梶子遺跡の北東側に位置し、三方原台地南縁に発達する砂州Iの縁辺部にあたる（図1）。

地点Nk-1は、2002年度のD地区発掘調査地域にあたり、2002年12月18日に地層観察ならびに試料採取を行った（図2）。

本地点の堆積物は、上から順にI～VII層に区分される（図9）。

I層（+0.40～+0.14 m）：植物遺体をまじえる粘土である。

II層（+0.14～-0.23 m）：泥炭混じりの淡灰色粘土である。

III層（-0.23～-0.44 m）：灰色～暗灰色の粘土で、泥炭をまじえる。

IV層（-0.44～-0.90 m）：泥炭を含む黒色粘土である。

V層（-0.90～-1.11 m）：泥炭を含む淡灰色粘土である。

VI層（-1.11～-2.08 m）：-1.11～-1.29 mの堆積物は黒灰色の粘土で、泥炭をまじえる。-1.29～-2.08 mの堆積物は泥炭を含む暗灰色の粘土であるが、下部ほど色調が明るくなり、砂を含むようになる。

VII層（-2.08 m以深）：暗灰色の砂層である。

I層からVI層までは、いずれも泥炭質の堆積物で、沼沢地・湿地環境で堆積したものであると推定される。またVII層の砂層については、厚さおよび周辺地域での分布が明確でないので、砂州堆積物の一部であるのか、河川起源の堆積物であるのかは、現時点では判断できない。

5. 東前遺跡（地点Hm-1）の地質層序と堆積環境

東前遺跡は、梶子遺跡の西方約5kmに位置し、三方原台地南縁の砂州Iの縁辺部にあたる（図1）。本遺跡からは、弥生時代後期以降の土器が見つかっている。

地点Hm-1は、2000年度に行われた発掘調査地域にあたり、2001年2月22日に地層観察ならびに試料採取を行った。

本地点の+1.70～+0.40mの盛土よりも下位の堆積物は、上から順にI～IX層に区分される（図10）。

I層（+0.40～+0.28m）：グライ化した褐色粘土で、明治時代の水田耕作土である。

II層（+0.28～-0.05m）：+0.28～+0.15mの堆積物は、植物遺体を少量含む黒色の粘土であり、砂をまじえる。+0.15～-0.05mは、砂混じりの黒色砂質粘土である。

III層（-0.05～-0.35m）：-0.05～-0.18mの堆積物は黒色の泥炭質粘土で、砂を含む。-0.18～-0.35mは黒色の泥炭質粘土で、淡灰色の砂とシルトをはさむ。本層中からは、古墳時代の土器片が発見されている。

IV層（-0.35～-0.63m）：黒色の砂質粘土で、泥炭を含む。

V層（-0.63～-0.73m）：-0.63～-0.66mの堆積物は、泥炭を含む暗褐色のシルト質砂である。-0.66～-0.73mは淡灰色の中～細砂で、植物遺体を含んでいる。

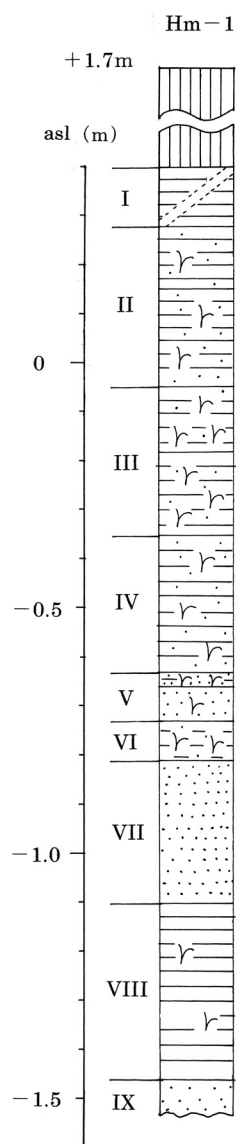


図10 東前遺跡における地質層序区分
凡例は図3と同じ。

VI層（-0.73～-0.81m）：黒灰色の泥炭質シルトで、砂を少量まじえる。

VII層（-0.81～-1.10m）：灰色の細砂である。本層中からは弥生時代後期の土器片が見つかっている。

VIII層（-1.10～-1.46m）：暗褐色の粘土で、植物遺体を含む。

IX層（-1.46m以深）：青灰色の中砂である。本層は、II層からVII層までの砂質堆積物とは異なり、植物遺体をほとんど含まない。

II層からVIII層までは全体に泥炭質のシルト・粘土層であり、沼沢地・湿地性の堆積物と考えられる。これに対して、IX層は海成砂もしくは砂丘砂であると推定され、砂州堆積物起源と考えられる。地点Hm-1のトレンチ床面の観察で、IX層が北東-南西方向に分布し、その上面が南東側に傾斜していることが確認された。

また、本地点から300mほど西側の地点で表層の試掘を行った結果、IX層に対比される暗灰色～青灰色の細・中砂層が、少なくとも1m以上の厚さで堆積していることが確かめられた。

以上のことから、IX層は東西方向に広く分布する砂州構成層である可能性が高い。今後、IX層相当の砂層の分布を明確にすることによって、この砂層が砂州I構成層の一部に位置づけられるのか、もしくは砂州Iの南側に埋没砂州が存在していて、その構成層であるのかの判断が可能になる。さらに、この砂層と、梶子遺跡周辺で確認された砂層（VII層）との関係についても明確にする必要がある。

6. まとめ

浜松低地の最も内陸の砂州地形（砂州I）周辺に分布する4つの遺跡において、地形・地質調査を行った結果、以下のようなことが明らかになった。

1. 遺跡周辺で確認された砂州構成層の下位には埋没海食台が分布することが明らかになり、背後の三方原台地の前面に形成された海食台地形を土台にして、砂州地形が形成されたものと推定される。
2. 後背湿地の堆積物の解析から、微地形として確認されている砂州地形のほかに、砂州Iと砂州IIとの間に埋没砂州が存在する可能性が明らかになった。

浜松低地に分布する遺跡の立地環境

3. 最も内陸の砂州地形（砂州I）の形成時期は、少なくとも7000年前頃までさかのぼると考えられる。
4. 砂州Iの縁辺から砂州IIとの堤間湿地に分布する堆積物の解析から、砂州IIが離水して背後を完全に閉塞した時期は、およそ6000年前と推定される。

今後は、微化石分析などを行うことによって、詳細な堆積環境を明らかにする必要がある。また、浜松低地の他地点における地質資料を解析することで、砂州地形やその基盤の分布がより明瞭になるものと期待される。さらに、遺跡発掘における考古学的な成果を踏まえて、砂州地形の発達に伴う堆積環境の変化と人間活動との関わりを考察することが可能になる。

謝辞

遺跡発掘調査の際には、浜松市伊場遺跡資料館の鈴木敏則氏と、浜松市博物館の太田好治氏に大変お世話になった。絶対年代測定は、名古屋大学年代測定資料研究センターの中村俊夫教授にお願いした。以上の方々に、深く感謝いたします。

引用文献

- 加藤芳朗（1979）：第12次発掘区の堆積層の観察と火山灰について。浜松市教育委員会『浜松市伊場遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』29～34。
- 加藤芳朗（1994）：梶子遺跡9次B区における上位土層の水田土壌学的検討と基盤砂層の粒径分析。浜松市博物館編『梶子遺跡IX本文編』113～116、浜松市文化協会。
- 加藤芳朗（1997）：梶子北遺跡の土層の地学的・土壌学的検討。浜松市博物館編『梶子北遺跡 遺構編（本文）』61～72、浜松市文化協会。
- 古環境研究所（1994）：梶子遺跡9次調査基盤層の自然科学分析。浜松市博物館編『梶子遺跡IX本文編』117～134、浜松市文化協会。
- 古環境研究所（1997）：梶子北遺跡の自然科学分析。浜松市博物館編『梶子北遺跡 遺構編（本文）』85～134、浜松市文化協会。
- 静岡県教育委員会（1989）：『静岡県文化財地図Ⅱ—焼津市以西—』静岡県。浜松市博物館編（1994）：『梶子遺跡IX本文編』浜松市文化協会。
- 浜松市博物館（1996）：『浜松市文化財分布図』浜松市。
- 浜松市博物館編（1997）：『梶子北遺跡 遺構編（本文）』浜松市文化協会。
- 増島 淳（1979）：伊場遺跡に堆積する火山起源粒子について。『浜松市伊場遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』34～40。

- Matsubara, A. (1988) : Geomorphic development of barriers in the coastal lowlands during the Holocene — A case study of the coastal lowlands along the Suruga Bay —, *Central Japan. Bull. Dept., Univ. Tokyo*, No.20, 57 ~ 77.
- 松原彰子 (1989) : 完新世における砂州地形の発達過程 ——駿河湾沿岸低地を例として——. 地理学評論, 62A, 160 ~ 183.
- 松原彰子 (2000) : 日本における完新世の砂州地形発達. 地理学評論, 73A, 409 ~ 434.
- 松原彰子 (2001) : 浜名湖および浜松低地の砂州地形. 慶應義塾大学日吉紀要 社会科学, No.11, 20 ~ 32.
- Matsubara, A. (2002) : Holocene geomorphic development of coastal barriers in Japan. *The Hiyoshi Review of Social Sciences*, Keio University, No.12, 37 ~ 68.
- Matsubara, A. (2003) : Relationships between Holocene geomorphic development of coastal ridges and human activities — A case study of the coastal lowlands along Suruga Bay, Central Japan —. *The Hiyoshi Review of Social Sciences*, Keio University, No.13, 23 ~ 40.